



With My Soul

RYO OGIHARA

1. Never Can Say Goodbye (C.Davis)
2. Can't Hide Love (S.Scarborough)
3. La La Means I Love You (T.Bell/W.Hart)
4. People Make the World Go Round (T.Bell/L.Creed)
5. Affirmation (J.Feliciano)
6. Save Your Love for Me (B.Johnson)
7. Valdez in the Country (D.Hathaway)
8. You Make Me Feel Brand New (T.Bell/L.Epstein/L.Creed)
9. One Hundred Ways (K.Wakefield/B.Wright/T.Coleman)

Produced by Akiomi Hirano

Recorded at Studio Dedé on 23 April 2021
Recorded, Mixed & Mastered by Akihito Yoshikawa (Studio Dedé)

Art Direction & Design : Hiroshi Kurisaki
Photograph : Takeo Hibino

福森 康
YASUSHI FUKUMORI
drums

荻原 亮
RYO OGIHARA
guitar

宮川 純
JUN MIYAKAWA
Hammond B-3 organ

不定期ながらも10年つづけてきた
大切なバンドでレコーディングできたことを
とても嬉しく思います。慣れ親しんだ
ソウルの名曲たちなので譜面も見えていません。
素晴らしい演奏をしてくれた
宮川純と福森康に感謝です。
リラックスして聴いていただけたら幸いです。

荻原 亮

Ryo Ogihara

オープンマインドが培った個性

トボロジー
まるで位相幾何学だ。

スタジオのコントロールルームで荻原亮のプレイを聴きながら、そんなことを考えていました。2020年10月に行った土岐英史『Little Boy's Eyes』(DOD-015)のレコーディングでのことです。サイドは井上銘とのギター2本だけ、という類のない編成のなかで、彼のギターから驚くほど多彩な表現が繰り出されてきたからです。

艶のあるクリーントーンから数多のエフェクターを駆使した電化サウンドまで、あるいは伝統的なジャズの語法から現代的でアグレッシブなニュアンスまで、とにかく表現の幅が広い。アイデアが無尽蔵に湧き出てきます。

しかもそのすべてが滑らかにつながっている。特筆すべきは、アイデアの連鎖が紙芝居のようなレイヤーの入れ替えではなく、絵巻物のようにシームレスな変容であること。次々に引き出しを開けていくというより、粘土の塊を線形的に変形させていくイメージに近い。

この意味で、荻原亮のギターはじつに位相幾何学的です。

“やわらかい幾何学”といわれるトボロジーの世界では、見た目が多岐にわたっていても、連続的な変形で到達可能な形はすべて同一です。ゆえにコーヒーカップとドーナツはおなじもの。不変に保たれる性質を共有しているからです。

ではいったい、荻原亮にとっての“不変に保たれる性質”とはなにか？彼のギターに宿る独特のテイストの源流にはなにかがあるのか？そもそも荻原亮とジャズの関係はいかなるものなのか？……。

俄然興味を掻き立てられたぼくは、気がつけば『Little Boy's Eyes』を録音している最中にレコーディングをオファーしていました。彼を主役に据えた作品をつくりたい。今度はレギュラーバンドというホームで思い切り腕をふるってもらおう。そんな思いを抑えきれなかったのです。

テーマに選んだのはソウルミュージック。直球ジャズの『Little Boy's Eyes』と聴き比べることで、荻原亮の表現世界をより俯瞰的に眺めてみたかったからです。宮川純+福森康という編成の魅力をもっと鮮やかに映し出す素材はソウルだろうと考えたこともモチベーション

のひとつでした。

オーディオマニアを父にもつ荻原亮は、物心がついたときから多様な音楽とともに育ちました。中学にあがって本格的にギターをはじめると、雑誌「ギターマガジン」をバイブルに、名前が出てくるギタリストをかたっぱしから聴き込む日々を送ります。

ジェフ・ベック、ジャンゴ・ラインハルト、パコ・デ・ルシア、ロバート・ジョンソン、ジョン・ウィリアムズ、ウェス・モンゴメリー……。ロック、ブルース、ジャズからクラシックやフラメンコにいたるまで、ありとあらゆるジャンルのギタリストを繰り返し聴く毎日。

ふつうギターキッズは憧れのギタリストのコピーからはじめますが、荻原亮はあえてそうせず、最初から音源をカラオケ代わりに自分の感性で弾き倒していきました。1年も経たずにスムーズに合わせられるようになった彼は、中2になると音楽の先生たちが組むバンドに迎えられ、Led ZeppelinやEaglesを苦もなく弾きこなすようになります。

高校入学と同時に上京。本格的に音楽に取り組むため、ひとり暮らしをしながらさまざまなジャンルのバンドに入って腕を磨きます。プログレバンド、ファンクバンド、ソウルバンド、ジャズバンド……。いずれも他のメンバーはプロを目指す大人たちでした。そんななかで鍛えられ、高校在学中からギャラをもらう生活を送ります。

20歳あたりからはアフリカの民族音楽やブラジル音楽に傾倒し、ほとんどジャズを聴かなくなります。じっさいアフリカ人のバンドに加入して彼らのスピリット・グルーヴを身体に取り込むなど、多様な音楽世界への探求がますます本格化していきました。ジャズへの興味が戻ってきたのは30代になってから。このころには個性的で屈強な“体幹”ができあがっていたにちがいない。

ジャンルが変わると演奏スタイルやマインドも変わるもの？そう訊くと、即座に「それはいいです」と言ったあと、こうつけました。「できることなら、自分が経験してきたこと、やって

きた音楽のすべてが出て欲しい。じっさい世界の偉大なギタリストはジャンルを問わずみんなそうだから」「たとえばバコ・デルシアのなかにもジャズがある。それなのに、わざわざジャズっぽく弾いたらちっちゃくなっちゃう。バコは“なにも考えずにぜんぶ出ている。”そこがいいんです」。

音大などの体系的な音楽教育から距離を取り、コピーさえしなかった荻原亮の血肉をつくったのは、まちがいなく無数のバンド経験です。彼はそうやって手に入れたジャンルレスの音楽体験を、つまりは膨大な音楽的知見を、同列・等価なものとしてアーカイヴしてきたにちがいない。それがあるとき無意識のうちに結びつき、直観的なアイデアとして意識のうえに浮かびあがるのでしょう。もとよりそこにジャンルの区別はありません。

ポイントはジャズをいっさい特別視していないこと。ミュージシャンを含む関係者やコアなファンのなかには、ジャズを「教養なくして理解できない至高の芸術」と考える向きが少なからずいるけれど、荻原亮にその種のスノビズムは微塵もありません。

「ジャズであれ、ファンクであれ、ブルースであれ、ぼくのスタンスになにひとつちがいはありません」。荻原亮はそう言い切ります。

「そもそも自分のことを“コンテンポラリー・ブルース・ギタリスト”だと思っている。じつはブルースマンなんですよ、ぼくは(笑)」。

あらゆる音楽を等価なものとして受け入れ、“ジャンルレス”を能書きではなく肉体レベルで消化する。あとは直観に任せ、計算せずにそのまま放出する。その結果、“なにも考えずにぜんぶ出ている”状況が立ち現れる。

それこそが、荻原亮が信じ、貫いてきた音楽の“スジ”であり、“不変に保たれる性質”なのです。

いったいどんなサウンドが立ち現れるのだろうか？ 荻原亮はこの状況にいかなるアプローチ

で臨むのか？

ソウルミュージックをテーマに据えた作品づくりなど経験のないぼくは、アウトプットのイメージをもてないまま、指折り数えてその日を待っていました。

そして迎えた録音当日。リラックスした雰囲気の中で、譜面もなく、打ち合わせもせず、気楽なセッションのようにじまったレコーディングは、気持ちのいいグルーヴを次々に送り出していきます。

シンプルなのにファットなサウンド、スピード感とレイドバックを併せもったリズム、ルーズなのに緊張感に満ちたアンサンブル…。

彼らの音楽はまるで、それぞれにディンギーを繰る3人が、美しい海で陽光を受けながら併走しているような、リラックスした遊びを混ぜる一方で、すべてをその場、その瞬間に組み立てる即興性が生み出すスリルとダイナミズムに満ちています。

この1点をもってまぎれもなくジャズなわけですが、もはやこの音楽をジャンル分けすることに意味はないでしょう。3人はソウルの様式美から完全に自由であり、かといって“ジャズっぽく”などとも考えていない。なにより荻原亮自身が、ジャズかソウルか、といった本籍論争に興味がないことは演奏を聴けばわかります。

この音楽のなかには、ソウルはもとよりジャズ、ファンク、ブルース…といった、荻原亮の身体にアーカイヴされている音楽的知見のあらゆる要素が織り込まれています。

ジャンルレスの音楽的資源を自在に引き出し、結合させる。その作業を瞬時かつ連続的に行うので、プレイがシームレスに変容していく。しかもそれを無意識のうちにやっている。

それこそがギタリスト荻原亮の本質であり、その本源はいわば「オープンマインドが増った個性」とでも言うべきもの。それが彼独特の強みの源泉なのだとはぼくは思います。

平野 暁臣 (Days of Delight)
Founder / Producer